

# 海が育んだ鹿児島島の歴史

## ④ 海から伝えられた高度な技術

### ■ 日食の中

平成二十四年五月二十一日の金環日食、世紀の天体ショーに日本各地は沸いた。鹿児島市はあいにくの曇り空であったが、雲の切れ間から日食を見ることができた。

さて、今から二百五十年ほど前、宝暦十三年九月二日（一七六三年十月七日）、日本各地で部分日食が起きている。この日食を江戸幕府の暦官たち（れきかんと）は予測することができず、暦に記さなかつた。ところが、薩摩藩の暦官・磯永周英（いそひさ）は、日食が起ることを予測し、的中させている。

### ■ 薩摩暦

薩摩では十二世紀頃から薩摩暦という独自の暦を作っていたという。安永八年（一七七九年）、二十五代

島津重豪（しげたけ）が中福良（現天文館通り）に明時館（めいじかんと）を創設したのも薩摩暦を作製し続けるためであった。

天明二年（一七八二年）に鹿児島を訪れた京都の医師・橋南谿（はせのくに）の著書『西遊記補遺』には、切り石で造られた高さ数丈の露台上に天体観測の機械が備えられ、毎夜天文生がこれに登って観測していたことや、「ゾンガラス（サングラス）」で太陽を観測していたことなどを紹介し、「天文のくわしき事は他方のなき所なり」と記している。

薩摩暦は、現在、鹿児島県立図書館をはじめ宮内庁や尚古集成館などに数十冊残されているが、それらを調査した研究家は、二様に精度が高いと評価している。どうも薩摩藩は日本の他の地域よりも優れた天体観測技術

を持つていたようである。

### ■ 文化と技術の国・薩摩

薩摩は武の国のイメージが強く、文化や技術は二の次とされてきたと思われがちである。また京都や江戸からは遠く離れているため、文化や技術が遅く伝わる後進地帯と誤解されがちである。

だが実際は、海外の物資・情報・文化がいち早く伝わってくるところであり、文化水準も技術水準も高かった。天体観測技術も古くから航海に必要だったため、海外交易が盛んな薩摩の地で発展したのではと言われている。

この他、武士道の精神的支柱となつた学問の朱子学（しゅうしがく）。中国で生まれたこの朱子学が日本で庶民の間に最初に

尚古集成館 副館長

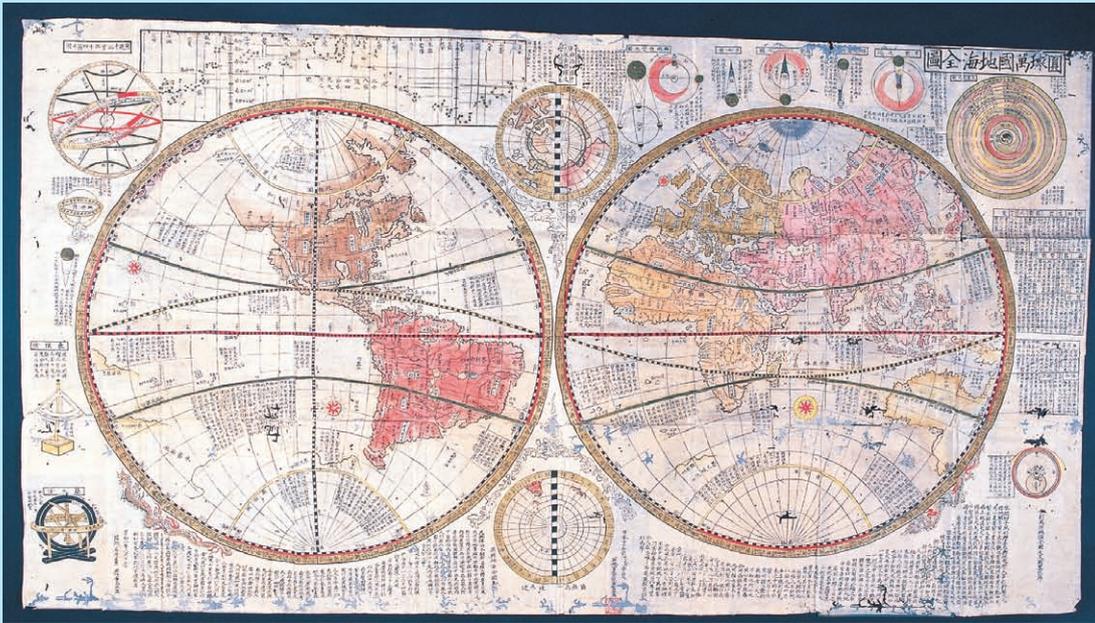
まつお 松尾 千歳

【プロフィール】

昭和58年鹿児島大学卒。同年、尚古集成館に入館し、学芸係長・文化財課長を経て、平成18年から副館長。島津家や薩摩藩の歴史・文化を研究。福岡県出身。

広まったのも薩摩の地であった。十五世紀末にまず桂庵玄樹（けいあんげんじゆ）が薩摩の地で朱子学を広めた（た）が薩摩の地で薩南学派を興し、それから約百年後に藤原惺窩（せいご）が京都で京学派を興している。しかも惺窩は京学派を興す前、薩摩の地を転々としており、薩摩の学問を盗んでいったという説もある。京都より先進的な面もあったのである。また、鹿児島城下の港湾施設も非常に優れたものであった。江戸時代、江戸や大阪などでは千石船などの大型船が接岸できる波止（はと）や雁木（がんど）（棧橋の階段）はなく、大型船は沖に停泊し、人や物資は沖で小舟に積み替え陸地へ運んでいた。ところが、鹿児島城下の波止・雁木は大型船が接岸でき、大型船から直接陸地へ積み降ろす

ことが可能であった。今もかしま水族館付近に残る新波止は、薩摩の地に日本最高水準の港湾設備があったことを物語っている。



えんきゅうばんこくち かいぜんず  
**円球万国地海全図** (鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

享和2(1802)年、25代島津重豪が唐通事石塚崔高に命じて造らせた世界地図。周囲には「黄道十二宮二十四説図」や「簡天儀」などの天体観測器具、地図の解説文などが書かれている。



めいじかん  
**明時館(天文館)** (鹿児島市立美術館蔵「鹿児島城下絵図屏風」(部分))

安永8(1779)年、島津重豪は薩摩暦の精度を上げるための城下に「明時館」という天体観測所を創設した。



天文館跡の碑(天文館アーケード内)



しもまち  
**下町波止場** (東京国立博物館蔵 Image:TNM Image Archives)

明治5(1872)年、明治天皇の鹿児島巡幸の際に撮影されたもの。下町は、江戸時代に整備された商業地区、港には多くの船が停泊している。沖に見えるのは弁天波止砲台(現ドルフィンポート付近)。砲台には台場砲が並んでいる。